

色まさる梢にそれとしら雪や庭には花のちりつもれども
散りつくす花とみだれて梢にはなほ色まさる庭のしら雪
一、山本基庸が雪の詠その他

ふる雪に跡かき絶えてかなしきは都をよその東路のそら
返し

詠めこし花にたくひて降る雪に都はさぞなあづま路の空
窓雪

さびしさをいかにしのべとしの夜の深き窓の雪の下折
風絶えて夜半にや雪のつもるらんそよ音なき窓の呉竹
年内立春

かさぬべき春の光も知られけり年のこなたの今朝の霞に
武藏野や日影の駒も行やらでやすらふ年に春は來にけり
風さゆる冬の日數にこし春はかすみの衣たちやまよはむ
久方のあまぎる雪のふる年にそれとも見えで霞む春かな

歳暮

衣手の寒けさ厭ふ冬の日も限れる今日は余波をぞおもふ
暮はつるけふにくやしき行年を心にこめて惜むはかなさ
かすみして春の光を松の戸に暮れ行く年をなど惜むらん

いつしかと年はくるれど武藏野の草の枕の果しなきかな
一、壬申試筆並に諸家新聲
五年壬申倚几試筆。

國民のあふぐこゝろの誠にも君が千とせの春はつきせじ
もろ人も松の千年をしらま弓君がいそぢの春にひかれて
追詠

いや年の内外のかすみ色添へて今一しほに見ゆる春かな
鐘の音のいとも静けくほのくとしのゝめ霞む春の初空
天地の恵もみつのはじめとはけふ豊かなる春にしられて
ことに猶春立けふはあら玉の聲とやいはむ軒のうぐひす
故郷のしら根も今朝や春霞雪げの雲にたちかはるらん
梅がえも年待えてや咲きぬらん春立けふの風かをるなり
春たてばにほひにそれと白雪のかゝれる枝も梅のはつ花
今朝はなほ花とやみまし峰の雪いたく霞のたちな隔てそ

壬申元日

室直清

残夜年光入曙鐘。家々春遍頌時雍。三竿日出池塘暖。五色
雲飛城閣重。文教移風邦有道。陽和煦物化無蹤。故園可去
誇多幸。林廟新成瞻禮容。去歲來于武陽。始拜昌平。故結句及此。

元日

田中宗得

人なみに我もかぞへん幾千代の春を初めの君がことぶき
愚詠鶯

たれ籠てあらはれやせん春の日のにほへる園に鶯のなく
梅

くらぶ山やみもあやなくなりぬらん軒端の梅に薫る春風
野外春望

明わたる嵐にさえてむさし野の霞漏れ出る富士の白ゆき
春雨

風さそふ梅の匂ひも柴の屋の軒端にしめるはるさめの空
梅

冬を経てあれにしいほりの袖がきも春は隔てぬ梅の初花
□しわかぬ春の光を松の戸にまち得て匂ふ梅のはつはな

柳

花のえにふるゝはいとふ春風を待えてめづる青柳のいと
鶯

青柳の糸を春風吹からにまづうちとくるうぐひすのこえ
春曙

山たかみほのかに霞む曙は花まつ戸をわすれてぞたつ

簪梅

雨はれてをちこちかすむ夕日影にほへる軒の梅のはつ花
今夜月いと艶なり。心あらばと思ふばかりにて、かく書つ
く。

みしにあらぬ春となわびそ梅が香を袖に伴ふ夜半の月影
一、前田吉徳髮置の賀

二月十三日。因吉辰勝次郎君御髮置の儀あり。野村與三兵
衛重徳、御白髮献之。依て御脇指相州御手自賜之。此御儀式
奉祝之、寄松祝。

春霞たちそふ松の若みどり千世にやちよの陰をふかめて
ときはなる山松がえの齢もて千とせの春に君ぞさかえむ
ことさらに今日を千とせのためしとや豊に通ふ松の春風

寄梅祝

おひ添て松に交せる梅がえや千歳の春はかさしなるらん
榮ゆべき千世のためしや白雪を厭ひもあへず匂ふ梅が枝
一、入木道の教を受けて
廿五日。入木道傳受誓約の状今朝認之、基庸の許へ遣す。